

## 「アクティブ・ラーニングと英語教育」

コーディネーター兼提案者：大場浩正(上越教育大学)

提案者： 宮野尚澄(富山県立高岡西高等学校)  
黒田浩代(三重大学附属中学校)

現在、次期学習指導要領に向けた中央教育審議会の議論において、アクティブ・ラーニングの視点からの不断の授業改善が検討されている。すなわち、「深い学びの過程」、「対話的な学びの過程」および「主体的な学びの過程」が実現できているかどうかという視点である。しかしながら、現時点では、単にペアワークやグループワークを行い、最後に振り返りをさせておけばアクティブ・ラーニングとなるみたいな風潮も感じられる。また、英語の授業においては、英語の知識の少ない学習者が英語を用いてコミュニケーション活動を行うこと(対話的な学び)の難しさや英語についての(例えばある文法項目についての)、所謂、学び合いが深い学びにつながり、活発なコミュニケーション活動に有効なのか、など他教科と違った難しさも感じられる。

本問題別討論会では、このような難しい状況を踏まえつつ、新しい時代に必要とされる資質・能力を育成するために、課題の発見・解決に向けた学習者の「主体的・協働的な学び」を促し、「思考力・判断力・表現力」を養うために、中学校、高等学校、そして大学の英語授業においてどのようにアクティブ・ラーニングを取り入れていくことができるのかを議論する。以下は、それぞれの発表内容の要旨である。

### あきらめさせないためのアクティブ・ラーニング

宮野 尚澄(富山県立高岡西高等学校)

「英語で授業を行うこと」という方針が示されたが、日本語を使った授業であっても、ついていけずあきらめってしまう生徒がいる一方、知っていることをくどくどと時間をかけて説明されてつまらないと感じている生徒もいるという状況をもどかしく感じていた。2年ほど前に定期考査の採点をしていて、どんなに説明をしてもまったく理解していない生徒がいることや優秀な生徒であっても100点を取るわけではないということに(当たり前であるが)気づき、すべてを説明するのではなく生徒の力に応じてそれぞれが意欲的に学ぶことで充実した時間にした、という単純な授業目標を定め、100%教え込まず、それぞれの到達度に応じて一人一人が脳を100%活動させる学習ができる授業形式を採ろうと考えるようになった。

手始めに行ったのは3年生のライティング(最後の旧課程生だった)で、グループで入試の文法問題を解かせ、次時に確認テストを行うという形式で競争させた。全員が真剣に考え、互いに教え合い、生き生きとした表情で取り組むようになった。これに気をよくして、リーディングの授業においても説明する時間を極力省いてグループで考えさせるようにしたところ、わかりやすいと好評であった。授業中に質問する生徒が増え、教師にとっても個別につまづいているところがよく把握できるようになった。

現在感じている課題は、あくまでも英語を理解するという段階にとどまっており、英語を使って何かをするという活動をあまり行っていないことである。今後少しずつ英語を使った活動を入れる方策を探っていきたい。

## 協働学習と授業改善から見えてくるアクティブ・ラーニング

黒田浩代(三重大学附属中学校)

生徒が考えたい、伝えたいと感じる発問や課題とは何か。生徒にとって魅力ある授業を目指すことで、生徒が学んだことを活用し、考えや思いを英語で伝え合える環境を提供できるのではないか。そして、生徒が主体的・協働的に学べる授業を展開することがアクティブ・ラーニングにつながるのではと考える。今回は生徒自身が当事者意識を持てるスキット活動をとおして、アクティブ・ラーニングな授業の実践報告をする。

普段の授業展開は、①単元の目標を提示、②課題の発見や解決に取り組む、③表現し合う、④振り返るである。授業をテンポよく進め、生徒を飽きさせないようにしている。本発表では、スキット活動の改善前と改善後を比較し、成果と課題などを報告する。

## アクティブ・ラーニングによる統合的な英語の活動ー「信頼に基づく協同学習」を用いてー

大場浩正(上越教育大学)

協同学習とは、「学習者が、小集団において、自分の学びおよび仲間の学びを最大限に高め、全員が学習目標の達成を目指す原理(理念)と技法」(Johnson, Johnson, & Holubec, 2002)であり、決して学習形態だけを示すものでも、単なるペア学習やグループ学習でもない。授業の中で、授業内容の学習と人間関係の構築が実現するような活動、すなわち、「信頼に基づく協同学習」(大場, 2015)が本来の意味の協同学習である。特に、より良い人間関係の中でお互いを思いやりながら英語によるコミュニケーション活動を行うことによって、児童生徒は進んで英語を用いようとするであろう。つまり、教室における、学習規律(ルール)と人間関係・信頼関係(リレーション)作りを心がけ、支持的風土を学級内に作ることによって、児童生徒は間違いを恐れず自信をもって英語で意思疎通を図ろうとするのである。従って、人間関係がよくなる仕掛けに基づき、質の高い対話や学習(学び合い)が生まれるような手立てが必要である。お互いの存在を認め合い、自分の存在意義を感じることができる集団づくりを、教科の指導を通して行うことが「信頼に基づく協同学習」の具体的な手立てとなるだろう。

本発表では、大学の英語の授業において、ジグソーによる英語読解活動及びその内容に関する英語による発表活動において、学習規律(ルール)の徹底と信頼関係(リレーション)作りを目指し、Johnson 達の協同学習の原理をとり入れた「信頼に基づく協同学習」の実践とその効果を報告する。